
Dangerous eyes

忍者猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D a n g e r o u s e y e s

【Nコード】

N 3 7 9 2 B A

【作者名】

忍者猫

【あらすじ】

mixi、及びpixivに掲載したTIGER&BUNNYと仮面ライダーSPIRITSのクロスオーバー作品。

殺人犯の濡れ衣を着せられ、記憶を奪われた仲間達に追われるWILDTIGERを助けたのは、FBI特別捜査官の滝和也だった。

act・1 (前書き)

取り敢えず前提設定として、シユテルンビルトがあるのはアメリカ西海岸（カナダ国境近く）、「バダン戦役10年後」、滝さんと虎徹さんはバダン戦役前、NY吸血鬼事件寸前に出会っていたと言っのを踏まえてください。

D a n g e r o u s e y e s

ニューヨーク
NYを飛び立って6時間余り、アメリカ西海岸はカナダとの国境
とほど近い場所にあるのがシュテルンビルトと言う都市だ。

ここ数10年で、ロサンゼルスやサンフランシスコよりも巨大で、
人種の増埒度合いを深めた街である。

海流の関係か、夏は暑く冬は底冷えするこの街は、同時に2つの
もので世に知られている。

1つは、3層構造の階層都市であると言う事。

もう1つは、『NEXT』と呼ばれる特殊能力者が多く存在し、
彼らの中から選ばれた『HERO』と呼ばれる存在が街を守ってい
ると言う事。

今、クリスマスを前にするこの街に、ひとりの男がやって来た。

『正義』を示す為に。

空港と都市を繋ぐ列車の中で、滝和也はそのニュースを見た。

昨夜起こった事件が、ほんの10時間ほどで犯人が確定されて報
道されている事もだが、その犯人とされる人物にも驚いた。

列車内の液晶掲示板に流れた殺人犯の顔は、彼の記憶に間違いが
無いならその街に於ける正義の代行者、つまり『HERO』の1人
の筈だ。

ざわめく周囲を無視し、滝は携帯ではなく耳に引っかけるタイプ
の通信機を取り出し身に付けた。本来なら咎め立てられそうなもの
だが、皆画面に釘付けで彼の事を見ていない。手元のリモコンで、

呼び出す先を定めると、そのまま相手を呼んだ。

「俺だ、隼人、少し頼まれてくれ」

購入物と連絡を言付けると、今度こそ携帯を取り出す。いわゆる使い捨てタイプの携帯電話で、通話以外の機能は求められていない代物だ。

短い呼び出し音の後、出た相手に彼はひょうひょうとこう頼む。

「あ、マーク？ 俺。今着いた。早速で悪いけど、ワイルドタイガーの情報集めといてくれね？ 良いじゃん、俺ファンなんだよ」

一見、30代のこの男が言うから、この街では余り違和感のないこの言葉。ここに、暗号が混ざっているなど誰が気が付くだろう？
ダークスーツにアタッシュケース、小振りなキャリングケースを引っ張るこの男の正体を知る者は、その場にはいなかった。

5日前、国連ビル内にあるFBI分室で、勤続20年目の捜査官である滝和也は、上司からの辞令を神妙な面持ちで受け取っていた。外部出向ではなく、FBIの別管区への出向は数年振りの話である。しかも、人員や必要機材その他の購入などは、すべて滝の判断に任せると言う大盤振る舞いである。

内容を黙読する滝に、上司は確認するように西海岸の都市の名を上げた。

「シユテルンビルト。現在は特別行政都市だが、51番目の州となる計画が出ている。国内で、いや恐らく世界で最もNEXT能力者を擁する街であり、同時に犯罪者の6割を能力者で占める街だ」

「イエス、サー」

「この街でのNEXT犯罪発生率は、他の都市の数十倍に昇る。このNYで1年間で発生するNEXTによる事件の総数が、あの街ではほんの1週間足らずで更新される」

「起こり過ぎです。幾ら能力者の人口比率が他所より多いとは言え、誰かが煽っているとしたか思えません」

滝の返答に、上司は大きく鼻を鳴らした。

「この街の有力者、名士と呼ばれる立場にある男、アルバート・マーベリック。だが、この男には幾つもの疑惑がある。特別背任に殺人、違法献金。挙げ句の果てに、ウロボロスなる犯罪結社との繋がりも見え隠れする」

そこで一旦言葉を切ると、上司は40代を過ぎて尚、未だ現役で街を走る男を見る。

本来の経歴で行けば、FBIの支部長なり、ICPOの部門長などになっていてもおかしくないと言うのに、現場にこだわり、また同時に若き日に関わった事件故に出世の道を自ら絶った滝は、勤続的には後輩になる上司を静かに見つめ返す。

「しかし、シユテルンビルト市警はこの男を調査する様子がない。

我がFBIの捜査に対しても非常に非協力的だ」

「それはそれは」

滝の口から、つい皮肉めいた応えが零れる。

上司の口調に、かなりの数の捜査官を潜入させたものの、さしたる成果が上がらなかつた事が伺える。

寧ろ、市警は敵ぐらいに思っただけ調査すべきなのに、普段ブツクサ言われつつも協力を得られていた事に胡座を掻いていただろう、後輩達を思うと頭が痛い。

滝が2年間戦った相手は、現地の警察に情報を貰えたことなど無かった。社会的に存在しない敵で、警察権力は彼らを検査するどころか、彼らの存在を云々する自分達の方をしょっぴく始末だった。しかも肝心の相手は、正面からぶつかるとは暴走するトラックの前に立つ事と変わらないような、怪物だったのだ。

「だから、タキ、おまえの出番だ。任務はアルバート・マーベリックの逮捕。ウロボロスの調査と可能なら壊滅。ウロボロスに関しては、半年の捜査期間を付け足す」

「……第1目標は、あくまでもマーベリックで？」
「そうだ」

周囲の空気がざわりと動く。

チーフルームの外で、様子を伺っていた同僚達がざわめいている。かなり大規模に、チームを動かしたにも拘らず全く成果を出せなかった案件に、実質一人に捜査しろと言うのだから。

だが、肝心の滝の方と言えば、やっとかと言いたげに肩を竦めると軽く敬礼して退出して行った。

その背中がドアの向こうに消えるのを見届けると、ボスの横にいた捜査班班長の1人が眉を顰めたまま、色々含ませ確認する。

「よろしいのですか？」

「仕方がない、何しろ奴はこう言うののスペシャリストだ」

そう言うと、ボスは大きく溜息を吐いた。

勤続5年目の管理職見習いは、窓際で滅多に捜査にも参加させて貰えないにも関わらず、何故か2、3ヶ月に1回ICPOから諄いほどの要請の元出向する男に疑念を抱いていた。

だが、そんな腰巾着の疑問に、ボスは黙って書類を眺めそして咳いた。

「仕方がないだろう。正義を示したのに、国家から切り捨てられそうになったあれを守るには、『使えない』事にしてしまっしかなかっただ」

中央駅からモノレールに乗り換え、降り立ったのはブロンズと呼ばれる階層都市の下段、その西側のほんのりと古ぼけた町並みは、ニュー Yorker にはダウンタウンを思い出させる空気があった。

その中に建つ、煉瓦造りの老朽化した雑居ビルへ滝は入って行った。

ここは、滝の指示で、現地捜査官に用意させた拠点だ。

その際、滝は現地警察及び司法関係者に、一切この拠点の事を知らせるなど厳命し、先行するバディにも話さないようきつく言い渡した。バディ側はともかく、現地との協力が云々とこねた捜査官に向かって、滝は二言で切り捨てた。曰く。

「死にたいなら好きにしろ、俺はお前を見捨てる」

ここまで言われれば、さすがに向こう側も滝に従う気になったらしい。何しろ、既にダース単位の捜査官が、行方不明になったり入院している状況である。

尤も、最後の嫌がらせとして用意した場末の古ビルが、滝の希望通りであったとは、後々知って言葉を失うのだが。

近々再開発の為解体されると言う、その10階建ての雑居ビルである。1階部分にシャッターが降りているが店舗として造られており、2階以上は事務所用テナントとなっている。

その中に入っているのは、7階に興信所の仮事務所と3階のミニコミ誌編集局の2つつきりだ。無論、これらもダミー会社で、滝の指示でそう言う看板を出し、必要な機材を入れただけだ。

必要なのは機材、そして休む場所と資材を置く場所。

20年足らず前、町中を駆けずり回った研修と、ほぼ孤立無援で民間協力者と共に東奔西走した2年間で確立した方法論だ。

さも、仕事でやって来た者ですと言う風情でビルの前に立った滝和也は、そのまま何の気負いもなくビルに入って行った。

そのビルから200メートルほど離れた場所で、彼に因縁をつけたチンピラが3人、『恐喝強盗現行犯』の付箋を額につけられた姿で、道端に親指を拘束され一塊りにされて転がされていたが。

古いエレベーターは、一応点検補修された様子で多少モーター音は大きい、使用に支障がない程度である。そのエレベーターで7階まで上がった滝は、『エアーマン興信所』と手書きの張り紙の付いたドアをノックした。

「はあい、どちら様？」

「NYから参りました、ビリー・ロンと申しますが」

中から、ぼおつとした声が掛かるのに、まじめに滝が応えようとドアが開いた。中にいたのは、男女3人。

1人は、気の強そうな濃い色合いの髪をショートにした女性。もう1人は、長いプラチナブロンドの、何処に出しても恥ずかしくないくらいのお嬢様然とした女性。最後の1人は男性で、先行して貰ったバディのマイケル・ソレルだ。

「ご苦労さん。ロサンゼルス(LA)管区の捜査官だな。NY管区の滝和也だ」

「お初にお目に掛かります、LA管区FBI特別捜査官エディス・パレスです」

「パトリシア・ウッドです」

「おう、悪いが早速調べて欲しい事がある」

滝の言葉に、早速とばかりにショートヘアのウッド捜査官が書類の束を取り出そうとした。

だが、その手を止めて、滝は女性陣が思いもしなかった事を切り出した。

「いや、被疑者の方は、今は置いておいてくれ。そうじゃなくて大至急調べて欲しいことがある。

楠木・T・虎徹と言う人物の記録を集められるだけと、ワイルドタイガーについて出せるだけの情報を出してくれ。

あと、ヒーローって呼ばれる連中の情報も拾えるだけ」「いきなりだな、滝。マーベリックの調査は良いのか?」

相棒であるアングロ・サクソン系の壮年の男が、年季の入ったデスクに座ったまま視線だけ上げて来た。

それに向かって、ムースで固めた髪を崩しネクタイを解きながら、滝はああと肩を竦めた。

「そつちはおいおいでいいよ。寧ろこつちの方が、上手くすれば現行犯逮捕も行けそうだからな」

「現行犯だつて?」

「おう、朝からやつてるニュース、見てないのか?」

「ああ、日系人が殺人を犯して、ヒーローとやらまで出る騒ぎになっっているな」

マイケルの言葉に、ノート型パソコンで情報を漁りつつお嬢様風のとやかそうな女性が口を開く。

パトリシアはネットポリス出身の捜査官であり、情報収集担当としてマイケル・ソレルがわざわざ引っ張った人材である。

「犯罪者が凶悪なNEXT能力者であると見なされた場合に限り、単独でもヒーローの出動が要請される場合がありますけど、今回は少し様子が変ですわ」

「どう違うんだい？」

「今回、被疑者が犯人として確定されるのが少々早いですわ。指紋が見付かったそうですが、前科があるならともかく初犯でこんなに早くなんて。それに、この被疑者は、NEXT能力者とのことです。が、まだ能力を使っているところが目撃されていませんわ」

「そう言えば、この街ではNEXT能力者の個人情報や司法局が一括管理しているそうだけど、警察から申告されたからって、直ぐチエック出来るのかしら？」

FBI（私達）は駄目だったわよねと、エデイスは同僚に視線で問い掛け、パトリシアも頷いてみせる。

だが、そこに割り込むようにマイケルが声を上げた。

「おい、滝、鍋木・T・虎徹と言う人物は、この街には存在しないぞ？ 検索に一切ヒットしない」

「ああ、やっぱりまずそうだったか」

「タキ捜査官、ワイルドタイガーの情報は閲覧不可になっています！ 嘘、タベ見た時には、ちゃんと公式ページに飛べたのに！？ 司法局のデータバンクも！？ そんな、上位者権限を持つ人間が消したって事？」

大いに慌てている同僚を横目に、エデイスは事態を淡々と受け止める責任者とその相棒を冷やかに睨み付ける。

「驚かれませんか、タキ捜査官」

「突端から冤罪と判ってたら、驚きようがねえだろう？」

「え？」

スーツをハンガーにかけつつ、滝は「これは個人情報」と軽く舌を出して見せる。

「鍋木・T・虎徹って人間の情報を消したのは、マーベリックだろうな。自社の社員だ、いくらでもいじったり消したり出来ると思うぜ？ まあ、奴さんが自社のヒーローを何の為に抹殺する気になったのか、までは判らないけどな」

「自社のヒーローって、え！？」

「ああ、知らないだろう？ ワイルドタイガーの本名って、鍋木・T・虎徹って言うのさ。俺、デビュー前からあいつ知ってるから」
「おい、滝！」

マイケルが振り返ると、滝の方はスーツどころかワイシャツまで脱いで、特製アンダースーツ姿で持ち込んだキャリングケースから出した私服を手にしているところであった。

薄手に見えるが、対刃対弾仕様に作られたスーツを隠すようにジーンズとシャツを着込みながら、滝はそう言えばとごく当たり前の事としてこう聴いた。

「マーク、俺のバイク、もう着いてるよな？ えらく運賃高かったんだけど」

「1階の店舗の方を、臨時整備室にしてある。一応整備士に梱包を解いて簡単に整備させたが、お前のバイクを見て呆れ返ってたぞ？

あんなにいじり倒されたバイクは見た事無いとさ」

「ありがとさん。じゃあ、俺は取り敢えず証人確保してくるわ」
「確保って、タキ捜査官！？」

呆然としている女性陣に手を振ると、滝はそのまま部屋から出て行ってしまった。

相棒のマイペース振りに溜息を吐くと、マイケル・ソレルは今更の事と手が止まってしまった二人に、作業を続けるよう声を掛けた。

アポロンメディアからワイルドエスケープをした鍋木・T・虎徹は、スカイハイとの空中逃走劇をこなし、ブロンズステージの一角で折紙サイクロン、ドラゴンキッド、ロックバイソンによる包囲網を掻い潜り、地下を抜けて脱出を図った。

地上で、待ち構えていたブルーローズに捕まりそうになったものの、彼が『殺人犯』である事に違和感を覚える彼女に無実を訴え動揺は見られたのだが、乱入してきた影によって拘束されそうになる。だが、黒と赤のワイルドタイガー、すなわち自身の「偽者」に捕まりそうになった虎徹を救ったのは、ルナティックと轟く爆音だった。

青い炎を壁に、黒塗りの大型バイクがガラクタを跳ね飛ばしつつ飛び込んで来る。

灰色のジャケットに黒のジーンズを穿き、ハーフェルヘルメットを被り、サングラスを掛けた壮年の男が、強引にバイクを停止させると右手を差し出し叫んだ。

「虎徹、乗れ！」

「へ！？」

声に覚えがある。だが、ここに居ない筈の相手に、虎徹は面食らったように立ち尽くす。

そんな相手に苛立ったのだろう、男は虎徹の腕を取ると、半ば抱え込むようにしてバックシートに乗せると、

「しっかり捕まってる！」

「ふえ？ ちよ、どわあああー！」

タナトスの青い焔が消える前に、大型バイクは物凄い勢いで車幅ぎりぎりの路地を突っ切った。

背後からの追っ手は、ルナティックが食い止めてくれたようだった。

大型幹線道路に出ると、虎徹は耳に引っ掛けるタイプの無線を手渡された。

運転者にしがみ付いたまま、何とか耳に引っ掛けると自動的に電源が入ったようで、電話でしか話せずにいたが懐かしく優しい声が耳に流れ込んだ。

「全く、何があっただってんだよ、お前現役ヒーローじゃなかったか？」

「た、滝さん、何でN・Yに居る筈のあんたが!？」

今、HONDAの黒い大型バイク　ワルキューレを走らせているこの人物は、10年前知り合いになったFBI（米連邦捜査局）特別捜査官だった。

直接会う事はここ数年無かったが、クリスマスと年賀状は必ず交換し、娘が生まれた時にはお祝いを、妻が亡くなった時には「負けるなよ」の一言をくれたのが滝だった。

その人が、自分を乗せてシュテルンビルトでバイクを走らせている事に、虎徹は現実感を感じられずぼんやりしてしまった。

だが、事態は一切待ってくれず。

いきなり、しなるように大きく進路を変えたバイクの直ぐ横を、真空の塊が街路樹をなぎ倒しつつ吹っ飛んだ。

「どわ!？」

「あつぶねえな、ここのヒーローってあれか、破壊する事に意義でもあるのか？　お前が《正義の壊し屋》って言われてたの知ってるが、この上行くぐらいお前壊してたのか？」

「いやそのなんちゅうか、ええい」

『待ちたまえ！ 鎚木・T・虎徹！ そしてその逃亡を手伝っている君！ 止まれ、そして待つんだ！』

大音声で呼ばわれ、通信機越しに舌打ちが聞こえる。

バックミラー越しに、何時も通り空中でびしりつとポーズを決める同僚の姿を見出し、虎徹のこめかみが痛む。

「一般人相手に何やってんだ！」

「まあ別に、能力者じゃないが、何も出来ない訳じゃないが、な」

不穏な言葉にあつと思うと、虎徹の手に滝は何やら一つ硬いものを握らせた。

「仕方ないから虎徹、こいつのピン抜いてまっすぐ上に投げろ、能力まではいらない、但し投げたらしつかり俺に捕まれ！」

「お、おう……って、何これ手榴弾!？」

「大丈夫、只の閃光弾、一般人にはな」

言葉の意味は、ピンを抜いて5秒後に、身をもって悟った。

ぱあつと、後ろから閃光が走ったと思うと、鼓膜と内耳を揺さぶられるような感覚に襲われたのだ。

思わず腕から力が抜けそうになったのを、滝の手が掴んで抱え直させた。背後からこれだとすると、正面から食らったスカイハイキース・グッドマンの状態が危ぶまれる。

「しつかりしろ、正面からじゃないから少しはましかと思ったんだがな」

「い、今のは何です!？」

「知り合いの研究者が試作した、対NEXT能力者用のスタングレネード！ NEXT能力者特有の脳器官に衝撃与えて昏倒させたんだ

「だあ！」

「何吠えてんだ、兄ちゃん」

灰色のジャケットに黒のジーンズを穿き、ハーフヘルメットを被り、サンングラスを掛けた自分より少し年上らしい男が、キョトンとした顔で大型の黒いバイクに跨つてすぐそばに居た。

頭の何処かで、夢を見ているなと思った。

10年前、結婚した虎徹はたまたま懸賞で引き当てた。これは妻である友恵の、NEXTと言う程ではないが持っていた引きの強さであった。旅行券を使って、遙か東海岸のN・Yへと新婚旅行へ行った。

着いた直後に妻とはぐれ、右も左も判らなくなった虎徹の元に、しどろもどろな説明だけで友恵を見付けて連れて来てくれたのが彼、滝和也だった。

「シュテルンビルトってえと、あれか、西海岸のびつくり都市！」
「びつくりって」

「だってお前、あの西海岸に、水害対策つたつてあんな高層階層都市造ってんだぜ？ 地震よりタイフーンが怖いってどうよ、それ」

彼の物言いに、虎徹は妻と目を見合わせた。

普通、シュテルンビルトを揶揄される時、真っ先に槍玉に上がるのはNEXTの存在なのだが。

だが『窓際捜査官』と自らを卑下したその男は、NEXTのことは一切触れず、そして虎徹のハンドレッドパワーを見ても全く動じる事無く笑った。

「おー、凄いやねえか。でも5分経ったら1時間使えないってのは、使い道に頭使っなあ。それに能力100倍って事は、おまえ自

身の素の能力が高くないと辛いだろう、鍛えてんのか？」

「滝さんは、俺の事、気持ち悪くないんすか？」

妻の居ないところで、全く変わらず笑う男に向かって虎徹は問い掛けていた。

NYで、頭上の落下物を受け止める為、うっかり使った能力に向けられた視線は、やはり「化け物」を見る目で。

慣れたつもりだし、幼い日の誓いを忘れた訳でもない。

それでも、知り合っただけの二日のこの人の、全く揺るがない優しさに虎徹は問わずに居られなかった。

「そつだなあ。なあ虎徹、昔話を聞いてくれるか？」

バイクに凭れながら、滝和也は遠くを見詰めるように西の空を見上げた。

まるで、その先にいる人を思うように。

「俺なあ、昔任務で日本に行った事がある。任務内容は、秘守義務があるから詳しく言えないけど、まあカルト組織の捜査だったんだ。全体で500人以上動員されて、日本には実働隊だけで30人以上派遣されて。」

でも、任務完了した時帰って来たのは俺一人、だったよ」

淡々とした声に、思わず聞き流しそうになって虎徹は目を見開いた。

「俺が生きて帰って来たのは、俺が優秀だった、なんて馬鹿な話じゃないよ。」

俺は運が良かっただけ。いいや、俺の無能のお蔭で生まれたヒーローが、俺の代わりに敵を倒してくれたんだ」

「ヒーロー、ですか」

「ああ、それも只のヒーローじゃない。鋼の体を持つ仮面の戦士、無償で戦い見返りを求めず去って行くんだ」

そう言う声は、今にも泣き出しそうだった。

ふと思いつく。

彼が子供達に話していた、《仮面ライダー^{マスクド}》の話。

人の手には負えない、吸血鬼や半獣人を素手で雑払う、風のように現れ朝日と共に去って行く、そんな「HERO」の物語。

乗り乗りで話す彼が、子供達の歓声を聞きながら泣きそうな顔を一瞬だけ見せるのに、気付いたのは妻だった。

「あいつらは、望んでそうなった訳じゃない。二人とも、あいつらに、悪魔に奪われたんだ、人間としての幸せも、未来も、ささやかな夢も何もかも。」

でもあいつは言ったんだ、「たとえ未来が変えられなくても、見過ごせない今を救えるのなら」って。

そんな事、あいつに言わせちゃいけなかったんだ、いくら改造されようが、頭が良かろうが、格闘技のエキスパートだろうが、あいつらは一般人だったのに！

俺の仕事だったのに！！」

「あいつら」と彼が呼ぶ存在がどんな人間か、想像も出来なかったけれど。

ただ、この優しい男が「救えなかった」と、未だに悔恨に苛まれるほど大切な「友人」だったのだから、虎徹は理解した。

そして、この男もまた、NEXTでこそないがHEROなのだと。

あれから10年。

念願のヒーローデビューを果たし、娘が生まれ、妻と死に別れ、会社が潰れ、新しい会社で生意気な新人とコンビを組まされ、そして能力減退に気付いて。

虎徹が目覚ますと、そこは何処かのオフィスのように見えた。色褪せたソファがあり、その二人掛けの方に彼は寝かされていた。窓から見える2重天井の風景から、虎徹はここがブロンズステージの雑居ビルの中とあたりをつけた。

「お、気が付いたか。びつくりするだろうお前、落としちまうかと思っただぜ」

ま、利き過ぎたかな？ そう笑いながら、ガチャリと古ぼけたドアを開いて入ってきた男の姿に、虎徹は改めて目を見張り、あの時聞けなかったことを改めて聞いた。

「……滝さん、何時シュテルンビルトに？」

「今朝だよ。着いていきなりお前の名前が大々的に殺人犯として報道されてるのを見た時にや、真剣に今日の日付確認しちまった。まさか、12月に四月馬鹿やる地域だったかと思っちまったよ」

たっぷり砂糖もミルクも入った、既にコーヒー牛乳と呼ぶべき代物を年下の友人に渡すと、同じものを啜りながら滝は小さなローテーブルを挟んで反対側の一人がけソファに座った。

もう、40歳をとうに過ぎた筈の相手は、やはり日系人故か、それとも体を苛め抜く仕事事故か30歳前半で通るくらいしっかりした体格を持っている。

10年前に比べると、笑いじわが増えた気もするが殆ど変わらない相手に、でも言われた言葉を反芻しながら聞き返す。

「あのお、滝さんは、俺がヒーローだった事、覚えていますか？」
「穏やかじゃねえ言い振りだな、まるでお前が……おい」

何か思い当たったのだろう、滝は目の前で項垂れる男に向き直る。ぼつぼつと、昨日サマンサ・テイラー、報道されている被害者の自宅を訪ね、一晩明かした事。その後出勤したら、IDが抹消され上司から忘れられ、殺人犯として報道されるは仲間である筈のヒーロー達から「知らない」と言われるのは事態に直面したと、虎徹は話した。

冒頭の話には頭を押さえたものの、会社での一件を聞いた滝は顎を撫でた後小型PCを取り出しこう言った。

「本来お前は要監視対象に数えられるんだが、現状は立派に被害者だからな。俺を手伝え、そしたらお前の方も便宜を図ってやる」

「便宜って？」

「俺は物見遊山でここに来た訳じゃねえよ、特別捜査官として来たんだよ」

そう言いながら、滝はタブレットPCを操作する。

「ここ10うん年、この街の方で変な動きがある。

言いたくないが、この街でのNEXT犯罪発生率は他の都市の数
十倍に昇る。

その大元を辿ると、どうもこの町の有力者らしいのがちらちら出て来るんだ。こっちとしては限りなく黒に近い灰色と見ているんだ
がな。

その割に、州警や市警の動きがおかしいってんで、FBIから何
度か内偵をやったんだけどな。そいつらが死体で発見されたり、頭
ん中が豆腐みたくになって病院に入ってる事が判ってな、俺にお鉢
が回ったんだ。

俺なら多少の事じゃ死なないし、NEXT相手でも大丈夫だってんで」

「な、待ってくれよ！ 確か滝さん非能力者じゃねえか！ それでどうにか出来る訳」

慌てふためく虎徹を、だが滝は可愛い生き物を見る目で見ている。

「いんや、NEXTは結局人間だろう？ 際限なく能力使える訳じゃないし、今のところ殺人犯を捕まえさえようとしているだけで、公開処刑ショーまでは考えてないだろう、黒幕も。まあ、まだ何か隠し玉を用意している可能性もあるかな？

それでも今動いてる面子の情報は俺も判ってるから、どうとでも動けるしな」

「それでも！」

「平気だって、俺は昔機械仕掛けの怪物相手に仕事してたんだ。装甲服を着込んだ、ちよつと変わった力を使う人間なんか楽な相手さ」

目を見開く虎徹に、『窓際捜査官』はにっこりと頬を吊り上げ笑った。あれは10年前、旅行先で見た光景。

彼は、ダウンタウンの子供達に向かって手振り身振りを交えて語っていた。

怪物たちを徒手空拳で倒す、仮面の英雄ヒーローの物語を。

「マスクライダー、ですか？」

「ああ、俺はあいつらと一緒に戦った。……まあ、俺は下っ端の戦闘員を倒すのと、怪人どもを足止めするのが精一杯だったけどな。

バダン騒ぎの時もICPOから呼び出されてな、色々やったから一応実績みたいなものはあるんだ」

バダン事件は、余りシユテルンビルト近郊では話題にならなかつ

た。

彼らが軍事基地を襲った後、この周辺ではロサンゼルスを襲った以外殆ど騒ぎを起こさなかった。事件の中心は、海の内側の島国だったからだ。

デビューしたての虎徹も、その頃は政情不安で多発する事件に連日出動していて、かつての祖国のことにまでは気が回らなかったが。

「おい滝、頼まれてたもの買って来たぜ！」

明るい声と共に、ガチャリと音を立ててドアが開いた。

帽子　キャスケットとは違う、白いダッチボーイキャップを被り、同じ色合いのつなぎ服を着た小柄な男性が、両手一杯に袋を抱えて入って来た。

思わず飛び上がった虎徹に落ち着けと言い置いて、滝は入って来た相手ににかりと笑って見せた。

「おう、助かったぜ隼人！」

「全く、お前が緊急回線なんか使うから慌てちまうだろう？ ほれ、食事と着替え。服の方、色探すの大変だったぜ？ 町中大騒ぎだしさあ」

「わりいわりい、お前がこの近郊で仕事してるって聞いたから思わず頼っちゃまった、いろいろ知ってるんだろ」

「ま、お前さんよりはな。オリエンタルタウンの方は、村雨が直接様子を見に行くとき。沖はミッション中だからこつちには来られないが、上でネットワークを洗ってみると言ってる。筑波と茂はもう来てる。敬介とアマゾンはそのそろ空港に着く頃らしいぜ。風見も行動に入ってるし、結城も今依頼を受けてる作業を終わらせたら合流するとき。」

で、本郷は何処にいるか判らねえ」

「あーあー、いいよあいつは。どうせ何時も通り、だ。」

また一番最後に来て、一番に人を置き去りにして突っ走りやがんだから」

「違うない」

がらつぱちに笑いあう2人に、虎徹は戸惑いを隠せない。

隼人と呼ばれた男は、どう見ても20代、日本人、いや日系人としても30代には到底思えない。

だが、歳の離れた友人と思うには、2人の空気が余りにも近過ぎるのだ。どう見たって同期、それこそ青春を共有して馬鹿もたくさんやった人間の距離感だ。

虎徹の疑問に気付いたのだろう、男は帽子を取ると芝居がかった仕草で頭を下げた。

「始めましてヒーロー。俺は一字隼人。フリーのカメラマンをやっている。」

滝とは20年以上の付き合いの、まあ悪友って奴さ。年齢は聞かないでくれよ、童顔の人間の苦勞はお前さんも判るだろう?」

「はあ……あ、すいません、俺、鍋木・T・虎徹です」
「おう、よろしくなあ」

虎徹が戸惑っていると、ケータリングのサンドイッチを取り出しながら滝が手を出せと言った。

腹ごしらえしると、虎徹にサンドイッチを三つ手渡すと、同じくローストビーフのサンドイッチを銜え滝は残りの袋を抱えて、部屋から出て行った。

その背中を見送った後、隼人は虎徹がサンドイッチを食べ始めるのを待ってから、にかりと悪ガキのように笑った。

「まあ、俺も手伝うし、俺の後輩どもにも手伝わせるから心配すんなよ。俺達は、まあそう見えないかもしれないけどこう言う陰謀事のプロだよ。まあ、今までの相手とは勝手が違うが、それこそ滝のフォローに徹しようと思うし」

「プロ、すか?」

「おう、荒事なら更に得意なんだがな!」

ケータリングのコーヒーを啜りながら、隼人は軽く笑って拳を作ってみせる。

「ところで、知り合いつて言うか、職場の関係者全員から忘れられたって?」

「あ、はい……」

朝からの流れを思い出し、俯いた虎徹に向かって被っていた帽子で口元を覆いつつ、隼人は軽く片眉を上げてみせた。

彼の経験からすれば、そう言うのはくつきりはつきり敵側の洗脳であった。

それで同士討ちスレスレの事態など、腹立たしいが何度もあった。

「俺達の経験で行くと、そりゃあ真犯人かその黒幕に洗脳されたって事になるけどな。NEXTって、そういう芸当も出来たりする訳？」

「え?」

思いがけない事を言われ、虎徹は目を見開いた。

その反応がまるつきり驚いた猫のようで、隼人は帽子で口を被ったまま笑いを噛み殺す。

(いかんいかん、笑い事じゃないのに)

「いや、俺も又聞きだけど、NEXT能力ってそれこそ百花繚乱、ささやかなものから、それこそお前さん達ヒーローのように派手で破壊力の高いものでもあるんだろ? だったら、記憶書き換えとか、記憶の上書きなんて改変出来る能力者も居るんじゃないかねえかって、俺は思ったんだけどな」

「記憶の改変……あ!？」

隼人の言葉を反芻するうちに、虎徹はバニー　バーナビー・ブルックス jr. が訴えていた事を思い出した。

記憶が崩れて行くんです。

犯人の顔が、知っている人間の顔にどんどん変わって行くん

です。

彼は長い間、両親の敵の顔が思い出せず、ある日いきなりジェイク・マルチネスが犯人だと『思い出した』。

しかし、ジェイクの右手には、長い間彼が目印としていた『尾を噛む蛇と剣』の凶案は無かった。何よりクリームの証言によって、事件の日には全く別の場所で別の事件　クリーム自身の誘拐事件であり、NEXTである彼女を家族はあっさり見捨てていた　に
関わっていたと分かり、そこから彼の憔悴が始まって。

これが、全て記憶の改変による物なら？

では、記憶を改変したのは？　バニーの傍に居て、記憶を頻繁に書き換える事が出来る人間など、誰がいる？

バニーだけではない、ヒーロー事業部の人間やヒーロー達、そしてきつとHERO|TVのスタッフもだ。HEROに関わる人間達の記憶をを、まとめて書き換えるなどと言う芸当など、そうそう出来ることではない。

あのバニーに警戒される事なく傍に立て、HERO関係者を簡単に集められる人間。

そんな人間など、1人しかいない。

「マーベリック氏が、黒幕、なのか!？」

「マーベリック？　アポロンメディアのCEOの?」

「自信はない、です。でも、あの人、いや奴が黒幕なら、俺のIDが使えなかったのも、直属の上司から忘れられていたのも、納得、いく気がするんすよ」

虎徹の呟きに顎をさすり、しかしふつと視線を真面目に据えると、隼人は碎いて含ませるように『仲間を探せ』と言った。

「1人ぐらい居るだろう?　お前さんがヒーローであることを知っ

ていて、今の職場と無関係な人間」

「！ 居ます、昔の上司が」

「じゃあ、お前さんがやるべきなのは、その人に会う事だな。そして、君がヒーロー『ワイルドタイガー』である身の証を立てるんだ」

隼人が笑うと、それにあわせるようにガチャッと音を立ててドアが開いた。

そこに立っているのは、自分と同じシャツとスラックス、ベストとネクタイをしてキャスケットを持った滝だった。顎に、ご丁寧に髭の代わりらしい黒いテープまで貼り付けている。

若干滝の方が、胸板も腰も厚みがあるのだが、手足が長めである為、本人と並ばなければ充分誤魔化せるレベルだ。

ぼかんと見上げる年下のヒーローに、滝は不器用なウィンクを見せる。

「これでウィッグを被れば、遠目にはお前に見えるだろ？」

「そんな、危ないっすよ！ させられません！」

「いや、俺としてはお前に思いつ切り危ない事をして貰う事になるからな、時間稼ぎくらいさせるよ」

戸惑う虎徹に、滝は「内緒だぞ」と言いつつ唇に人差し指を立ててこう続けた。

「俺の捜査対象は、アルバート・マーベリック。

奴には、100を超える違法献金と不当買収、20の殺人に関与が疑われている」

「！」

「お前がヒーロー達相手にどたばたしている間に、俺は特別捜査官としての仕事をする。」

だから、その為にも今はお前が向こうと真っ向からやり合えるよ

う、準備時間を稼ぐのさ」

「心配要らない、こいつは俺と仲間が守るから。それより、君のほうこそ気をつける、一応後輩どもにカバーに入るよう指示は出してるけど、上司たらずう人を見つけるのは、悪いが君にしか出来ないしな」

先程とは打って変わった口調に、虎徹は納得した。

確かにプロなのだ、この人も。

「あ……はい！」

「あ、無線落とすなよ、何かあったら助けに行くからな！」

滝と隼人の差し出した手を、虎徹はしっかりと握った。

チューリップハットに、少しくたびれたポンチョを羽織った虎徹が出て行くのを見送りながら、滝と隼人は屋上に立った。

頭上には、バベルの塔もかくやの高層建造物が見える。

水害を逃れるべく積み上げられた都市は、確かに人類の英知を現すのだろうか。

「怖いねえ、あの天辺はキングダークより高そうだ」

「いやあ、岩石首領クラスだと思うよ？ ま、これから3時間ほど逃げ回らなきゃな！」

「ああ、まあ怪人共相手よりゃあ楽だと思っがよ」

「しっかし、ワイルドタイガーって言ったっけ、何っつうか、ほおつとけねえ奴だったな」

「あ、判るか？」

「判る判る、本郷とか村雨とか、目を離すと不味そうな感じ？」

「お前なら判ってくれると思ったよ」

そう笑いながら、ふっと表情を引き締め滝は傍らの男に「すまねえ」と言った。

「奴ら絡みでもねえ、俺の「仕事」に巻き込まんじまって」

「なあに言っただよ、水臭い事言っただよ、嬉しかったんだぜえ？
いの一に頼ってくれたのが俺でさ」

そう言っ、鼻の下を擦りながら隼人は続けた。

「なあ、相棒！」

「おう！」

肩を組む。

思えば20数年前、もう1人 『始まりの男』と呼ばれた男と
3人で、悪魔の軍団と戦ったのだ。

あの頃の、絶望と果てない悪夢を思えば、今の状況など鼻歌交じり
りでこなせそうだ。

20数年時を刻んだ男と、20数年変わらぬ姿の男、2人は同時に
ビルの屋上から隣のビルへと飛び出した。

彼が元上司に出会うまでの時間を稼ぐべく、これから派手な逃亡
劇を演じねばならないからだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3792ba/>

Dangerous eyes

2012年1月12日02時00分発行